

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0272100967		
法人名	社会福祉法人 鯉ヶ沢町社会福祉協議会		
事業所名	鯉ヶ沢町社会福祉協議会 グループホーム安心住宅		
所在地	青森県西津軽郡鯉ヶ沢町大字種里町字前田37番地3		
自己評価作成日	平成24年9月30日	評価結果市町村受理日	平成25年1月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 青森県社会福祉協議会
所在地	青森県青森市中央3丁目20番30号
訪問調査日	平成24年11月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者の処遇にあたっては、自己決定を尊重することをまず念頭におき、実践している。 入居者が和む環境設定に関しては、入居者に相談を持ちかけ、その方法を一緒に検討して取り組んでいる。 また、ボランティア活動者に気軽に来てもらえるように呼びかけている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、近年の幼児童の減少に伴って閉鎖されることになった保育所を改装して設立され、地域福祉の拠点となっている。 「地域社会にふれながら のびのびと明るい 楽しいわが家」を理念に掲げており、利用者がホームで生活されるにあたって、「生活環境」と「人間関係」を重視し、安心・安全な生活を送っていただけるよう支援している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求め ていることをよく聴いており、信頼関係ができてい る (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらい				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらい				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面が ある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域 の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係 者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所 の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表 情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満 足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく 過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにお おむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟 な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念としての理解が日々のサービスで直接提供されているとは言い難い。施設処遇の域から抜け出せない部分がある。	「地域社会にふれながら のびのびと明るい楽しいわが家」というホームの独自の理念を作成しており、常に職員の目にふれるようホーム内に掲示する等、共有化に努めている。管理者及び職員は一方的なケアの提供者ではなく、利用者のパートナーとして日々関わり、理念の理解とサービスの実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の人が立ち寄ることは多くない。入居者が散歩時に商店に寄ったり、立ち話をする等の交流に留まっているが、開設して8年目であり、地域にある施設としての理解はされている。	散歩時に挨拶を交わしたり、宵宮等の地区の催事への参加等により、地域住民との触れ合いがある。小・中学生の福祉に関する学習や職場体験学習、大学生や介護員の実習の受け入れ等を行っている他、東日本大震災の際は施設を開放したり、広報誌を配布する等してホームの社会的機能や役割についても理解していただけるよう働きかけている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実習生の受け入れやボランティアの訪問はあるが、専門性を還元する力はまだ不足しており、発信の機会も多く持っていない。町内に広報誌は年に数回、発行している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隔月開催の運営推進会議での話し合いでは、入居者の状況と職員の対応について説明し、そこでの意見を十分認識し、サービスの向上に努めている。	運営推進会議は2ヶ月に1回開催しており、近くの委員へは職員と利用者が一緒に開催案内を届ける等、積極的に参加を促している。会議では利用者の暮らしぶり等の報告や疾病に係る課題、防災関係の提案等、活発な意見交換が行われており、サービスの質の向上を図り、地域におけるホームの役割や機能についても理解が得られるように取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には行政の担当者の出席を必ず得ている。その他、その都度、指導を得ている。	行政の担当者は運営推進会議に毎回参加しており、情報提供や意見交換を行っている。自己及び外部評価結果の報告、広報誌等を配布している他、ホーム運営やサービスの質の向上に向けて、具体的な課題についても随時照会する等、行政との連携がなされている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	無断外出時の対応の備えとして、広報誌等を通じ、連絡をいただけるよう地域に依頼している。日中は殆どの戸は施錠していない。ベッドからの転落防止について、日中は30分毎に確認をしている。サイドレールや居室引き戸に鈴をつけ、見守りに駆けつけることができるようにしている。また、禁止行為は周知している。	身体拘束を行わない方針で日々のケアに取り組み、職員はその内容や弊害について理解している。利用者の細かい仕草や言動等に注意し、早めに外出傾向を察知できるように努め、必要時には職員が付き添う等の支援を行っている。また、駐在が立ち寄った時や運営推進会議、広報誌等を通じて、無断外出時の協力を働きかけている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待行為の具体性に関して、理解に不足がある。言葉や視点については認識を深めたり、転換する必要がある。研修機会を更に増やしていく。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	個々に利用している場面を通じて、一般的な知識は有している。状況の変化に対応して必要な支援等を話し合い、実践の機会を逃さないように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	本人及び家族両者の意見を拝聴し、契約等の意思を確実に把握しており、説明は丁寧に行うことを心がけている。また、納得を得たり、心配事を解消させるための話し合いをしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族等の面会時には職員も必ず話を聴くようにしている。家族の意見は十分に尊重したいと考えているが、面会自体が少ないので対応を働きかけている。	利用者や家族から意見や要望等が寄せられる機会が少ないものの、定期的に利用者の暮らしぶり等を報告する際に、意見や要望を引き出すように取り組んでいる。また、重要事項説明書でホーム内外の苦情受付窓口を明示しており、出された意見等を検討し、速やかに対応する体制を整えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	申し送りは主に処遇面であるが、運営に関してもこれでよいのか等質問をし、職員の意見の反映に努めている。	ホームでは申し送りや職員会議の際に、処遇や運営に関する職員の意見を聞くようにしており、出された意見を反映するように努めている。職員の資質向上のための支援や職場環境の整備に努めており、利用者との馴染みの関係を保てるよう、職員の意見を聞きながら勤務体制等にも配慮している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、職員の努力や実績を理解し、職員がやり甲斐や向上心を持てる職場環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護福祉士資格取得の支援を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	交流会等に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者が早いうちに新たな生活に慣れることができるよう、入居当初に各職員が入居者との会話を多く持つようにしている。前半の対応が大事なことを認識している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にはできるだけ細かな説明をし、不明な点は質問するように配慮している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	高額療養費の利用方法や限度額等、家族が理解することで安心できる事柄については、しっかり伝達している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は勤務の際に「協力お願いしますね」と言い、入居者は「いいよ」と言ってくれる。物事を実施する際は、必ず選択肢を示すようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族自身の困り事に関して思いを尋ねる等しながら、援助者としての思いを積極的に話し、意見を求めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	時々、外出して自宅を見に行ったりしている。以前の近隣者に会った際には、来所をお願いをしている。また、知人等が来所した事を忘れないように、承諾を得て写真に残している。	入居時のアセスメント等でこれまで関わってきた人や馴染みの場所を把握している。家族や知人等に面会に来ていただき、利用者が忘れないように写真撮影をする等の支援をしている。また、希望に応じて利用者の自宅を見に行ったり、年賀状等を出せるように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	理念として、家族のような親しい関係づくりを目標の一つにして、「みんなの役に立ちたい」という入居者の意向を尊重し、関係づくりを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去者の様子に関しては、家族等から間接的に情報提供を受けている他、時々退去者本人から電話があった際には対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の場面を詳しく記録することで、その時の本人の思いや言葉には表れなかった意思等を汲み取れるようにしており、日中・夜間の状況に関して口頭での申し送り後に記録を加えたりしている。	日々の暮らしの中で、言葉に表れなかった利用者の思い等を汲み取るために、一人ひとりの視点に立ち、詳しく記録して把握に努めている。毎日の申し送り時や記録等から、利用者の心身の状況や「利用者がしあわせと感じる時」等、情報の共有化に努め、必要に応じて各関係者から情報収集し、利用者への訪問や声がけをお願いしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者からも時折、情報として得たものは記録するが、面会の際等に家族や友人等からも積極的に話を聴くようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	努めて日課を通して変化に気づき、心情の把握や能力の状況について知ろうとしている。個人が有する能力等の把握については不十分な状況にある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の変化に介護計画が追いついていないのが実情である。入居者を知ることと現実に起きている問題事項の整理を常に行いながら、月単位で評価を行っている。	介護計画は日々の業務日誌から利用者毎に記録を拾い、問題事項を整理して、毎月個別評価をしており、利用者本位の個別具体的な計画となっている。できる限り利用者の話を聞いたり、家族の意見を聞く機会を確保するように努めており、職員の気づきも参考に作成している。また、状況等に変化に応じて随時の見直しを行っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の業務日誌上の出来事及び申し送りでの検討を加えて、個別記録の作成を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人にとって必要なことは何かを重大に考えるようにしている。ホームが実践できることであればサービスとしてプログラム化をしている。また、家族が安心することは実施したい。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地区の駐在所、民生委員等、ボランティア等を把握し、協力を依頼している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人の状況に関して、日常的な視点から提言したり、本人の意思を代弁する等、つなぎの役割を行っている。	利用者の受診には利用者及び家族の希望を取り入れて支援している。ホームは町立の総合病院と協力病院の契約を交わしており、同病院の地域連携室の看護師等と具体的な相談や情報交換を行っている。また、職員も認知症の症状と原因の正しい理解に努め、医師へ利用者の症状を的確に報告し、適切な医療を受けられるように支援している。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	各種検査等の指示を守り、治療における不明な点等を質問している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院や他の地域連携室の担当者に適宜、相談をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	受診に同行してもらったり、家族との相談は欠かさずに行っている。特に詳細な説明が必要な時は、一緒に主治医の話を聴いている。	入居時に、ホームにおいて重度化及び終末期に至った際の対応はしていない旨、利用者や家族に説明をしている。利用者が重度化等で他の医療機関や施設に移行する際は、退去後も家族等が不安を抱かないよう、受け入れ先への情報提供等に努めている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	冷静に対応する能力については経験と入居者の理解が必要である。疾病や現在の身体状況についての知識と理解については、特に緊張感を持って認識している。応急手当や救急救命の研修を受講している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を実施して、入居者のADLにおける困難さを理解している。地域の協力が得られるように働きかけている。	利用者及び職員合同の訓練を年2回実施しており、災害発生時には近隣住民からの協力をいただける体制となっている。また、東日本大震災発生時には地域の高齢者を受け入る等、災害発生時の拠点的な役割を果たしており、暖房器具や食料、飲料水等を備えている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	皆の前で話すことと個人と話すことについては明確に分けており、誤解を与えないようにしている。プライドやプライバシーには十分に配慮している。	利用者と接する上で、その場その場での対応ではなく、認知症状も含めて利用者を受け入れるという考えで支援するように指導しており、職員は利用者の言動を否定したり、拒否していない。また、利用者のプライバシーと尊厳に配慮して支援に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定の支援として、状況を説明した上で選択肢を示し、行動に移せるように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎朝のレクリエーション時に質問等をして、把握に努めている。散歩を要望すれば、他の入居者にも意向を確認する等、集団生活ではあるが個人の要望も聞き入れて、できる限りの支援を実践している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類については自分で選んでもらい、時節に合わない時は適宜助言や一緒に探す等の支援をしている。特に、1枚羽織ることができるベストやカーディガンの衣類を用意してもらう等の配慮をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の下ごしらえは多くやってもらうようにしている。特に机上で可能な作業（皮をむく、枝豆を外す、菊の花びらをちぎる、コロックを丸める等）は皆で取り組むように促している。	利用者の状況に応じて、裏の畑から野菜を収穫したり、食事の下ごしらえや後片付け等を職員と一緒にやっている。職員は可能な限り利用者と同じ席に着き、食事の摂取状況や食べこぼし等にも注意を払いながら、和やかな雰囲気です食事時間を過ごしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量と水分の摂取量を記録して、必要量を確保している。暑い時期は夜間にも要望を確認し、水分補給を促している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後のうがいと入れ歯の洗浄は、必定として支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排尿の間隔はなかなか一定しないが、日中は全員トイレでの排尿を支援している。夜間は、まず起きれるかを確認した上で、トイレ誘導を実施している。	利用者の一日の排泄パターンを把握しており、トイレ誘導や尿意を確認する等、利用者毎に個別の対応をしている。これまでリハビリパンツの使用がなくなったケースもあり、排泄支援に関して随時見直しをしながら、利用者の羞恥心に十分に配慮の上、支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜・水分は規則正しく摂取するようにし、屋内外の散歩や手すりを使った歩行練習等も行っている。できる限り、本人にも自覚を促すような声かけをしている。また、排便のリズムは確実に把握している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	入浴日は決めている。(週2回)但し、気温が高い日や汚れがあった場合等、必要に応じて入浴支援をするようにしている。	アセスメントや日常生活の関わりの中で、利用者の入浴習慣や好みを把握し、入浴支援に取り組んでいる。ホームのお風呂はヒバ造りで、温泉気分で入浴を楽しむことができ、滑り止め用のフローマットが施され、安全確保にも配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者は顔馴染みの人達と一緒に居ることを望まれるようだが、居眠り等をしている場合は居室のベッドで横になるように促し、30分程度で起きられるように声かけをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服に関しては、確実に服用してもらうことを第一として、内服薬に変化があった時は記録をし、口頭による申し送りを行うことで職員間にしっかりと伝達している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌を練習して地域のカラオケ大会に参加したり、発声練習を呼吸法の訓練にしたり、歌詞を書き写して覚える努力をする等、お互いに影響し合っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	運営推進委員の自宅へ文書を持って行ったり、手紙を投函するためにポストがある商店前まで出かけることもある。家族に協力していただける場合には、日頃、入居者が希望している場所を教える等して交流の支援をしている。	近所への散歩や手紙の投函、運営推進会議の開催通知を届ける等、できる限り外に出る機会を持ち、地域住民との交流等で気分転換が図れるように支援している。また、利用者が行きたい場所の把握に努め、必要に応じて家族等に協力を呼びかけている他、利用者の身体状況等も考慮の上、外出支援に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者自らの希望により、一定額を所持している。週2回の買い物時に同行したり、通院時を利用して買い物をする等、生活の行為としての楽しさを支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状や暑中見舞い等を書けるように支援し、投函もしている。家族の中には差出人について確認の電話を入れてきた方もいた。記名は9名中、8名が可能であった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	あまり外に出たがらない入居者のために、食堂から見える所に花を植えている。時々、居室にも花を活けて、季節感や香り等を楽しめるようにしている。	ホームの窓からは周辺の田園や連なる山々等が見渡せ、季節の移ろいを感じることができる。利用者と一緒に裏の畑で野菜等を栽培し、収穫したものを食事に取り入れたり、敷地内に栽培していた花を生ける等、季節を感じることができるような工夫をしている。また、温・湿度計の設置や洗濯物での加湿、日射しや照明等を適切に保ち、ホーム内が快適な空間となるように努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	適宜、利用者と話し合って席替えを実施している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	状況によってテーブルを持ち込んだり、ベッドの位置を変更する等、入居者の状況に合わせた居室となるよう話し合い、実施している。	入居前から愛用していた物の持ち込みを積極的に働きかけており、居室には利用者のこれまでの思い出が詰まった家族の写真や位牌等がある。持ち込みが少ない場合には利用者と相談しながら、一人ひとりに合った居室づくりに努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりが壁と同色であるので、テープ等を巻いて、よりわかりやすくしている。		